



川場村の“むら自慢”と 平成24年度のあゆみ

私たちが住む川場村は、武尊山の麓にひろがる総面積85.29k㎡のうち全体の86%が山林に囲まれ、4本の一級河川を有する資源豊かな山村地帯です。
ここ数年でこの土地から発信されたうれしい出来事をご紹介します。

<人気の道の駅>

平成10年に完成した道の駅川場田園プラザは、村の景観に溶け込む環境の良さや広い敷地が人気となり、関東道の駅連絡会が実施したスタンプラリーアンケート「関東好きな道の駅ベスト20」で平成16年から平成20年の5年間連続1位に選ばれました。

また、平成23年の日本経済新聞「何でもランキング」では、専門家が選ぶ“家族が一日楽しめる道の駅”部門で東日本第1位（540ポイント）に選ばれました。西日本第1位（450ポイント）の「小豆島ふるさと村（香川県）」と比較しても90ポイントの差をつけて堂々の日本一といえるのではないのでしょうか。

人気の秘訣は、なんといっても“食”へのこだわりに尽きると思います。田園プラザ内にあるビール工房が製造する地ビールは日本地ビール協会主催の「ジャパン・アジア・ビアカップ」において2年続けて入賞しています。

2009年）銀賞：ヴァイツェン

2008年）金賞：ピルスナー、銀賞：ボック



<ハム・ソーセイジ>

田園プラザ内で人気のスポットとして知られるミート工房かわばのライブ山賊焼き。

ビール工房の地ビールとの相性が良く、連日行列が絶えません。こちらで作られるハム・ソーセイジは本場ドイツデュッセルドルフで修業を積み、マイスターの資格を持つ工房長の確かな技術と製法により、4年に1度行われるドイツの食肉加工協会主催S U F F A国際食肉製品品質コンテストにおいて1999年、2002年、そして2009年に出品したところ、スモークハム・フランクフルト・チーズクナッカーは金賞、ベーコン・ラオブブルストは銀賞、クロイタボックブルスト・ホワイトソーセイジは銅賞を受賞した自信作です。

また、昨年11月に池袋サンシャインシティで行われた全国商工会連合会主催の「ニッポン全国物産展」では、全国から参加した350店のうち、ミート工房が販売したライブ山賊焼きやハム・ソーセイジが大好評で開催期間中の売上げNo.1となりました。



<川場の地酒>

村内には2軒の酒蔵が開業しています。ひとつの村に2軒もあるのは、霊峰武尊山から育まれた豊かな水が集まる“川場”ならではの知られざる事実です。

まず1軒目は創業明治19年の永井酒造。永井酒造を代表する「水芭蕉」は、日本酒業界最大規模の品評会「全国新酒鑑評会」において、昭和41年から平成24年までの間に15回の金賞と5回の入賞を受賞しています。また、開発に5年の歳月を費やした「MIZUBASHO PURE (ミズバショウピュア)」は、世界初の瓶内二次発酵した発泡性清酒として三つ星レストランにも採用されています。

2軒目となる土田酒造は創業明治40年。戦前の日本醸造協会主催の「全国酒類品評会」において、優等賞を連続で受賞しないと授与されないという名誉賞を昭和11年に受賞。近年では、国際的品評機関の「モンドセレクション」において3年連続で金賞受賞や梅を日本酒（譽國光）で漬けた梅酒のほか、日本酒と麴を使った化粧水など女性を意識した商品が充実しています。



<雪ほたか米コンで6年連続金賞入賞>

昔から稲作が盛んであった川場村は、霊峰武尊山から湧き出る天然水を使った米作りで、良質なお米が収穫されたことから昭和16年に宮中へ献上したと記録に残されています。

平成17年には当時と同じ支度で献穀祭を行い、川場村産コシヒカリとして商品をブランド化。武尊山の豊かな恵みに感謝する気持ちを込めて、「雪ほたか」と名づけました。その後、米・食味鑑定協会主催の「米・食味分析鑑定コンクール」に出品し、平成19年から平成24年の6年間、連続で金賞を受賞しています。

生産者が丹精込めた作ったお米でも栽培履歴や等級検査後、食味計で基準のスコアをクリアしなければ「雪ほたか」として販売ができない幻のお米なのです。



<雪ほたかの糶酒>

先に紹介した雪ほたかの糶と川場の水で仕込んだノンアルコールの甘酒「雪ほたかの糶酒」が、全国商工会連合会主催の「むらおこし特産品コンテスト」で全国商工会連合会会長賞を受賞しました。

考案したのは、川場村商工会青年部長を経験された遠藤淳さん(谷地)。「雪ほたかを使って川場村をPRしたい!」と青年部の仲間と1年かけて開発したそうです。自らが営む電子部品製造業とは異なる取り組みですが、郷土愛を感じる新たな特産品の誕生です。



<川場小音楽クラブ2年連続全国大会出場>

川場小学校のクラブ活動である金管バンドが全日本吹奏楽連盟と朝日新聞社が主催する「全日本小学校バンドフェスティバル」へ2年連続3回目の出場をしています。出場した35校のうち村立小学校は川場小学校だけです。少人数ながら川場村の子どもたちのがんばりには目を見張るものがあります。そして先生方や保護者の皆さんの協力があるからこそ成し遂げられた結果です。



<サッカーグラウンドオープン>

スポーツ広場が天然芝のサッカーグラウンドとしてリニューアルし、完成記念式典が行われました。この事業はスポーツを通じた地域活性化をはじめ、村民の健康維持や増進を図ることを目的に「川場村スポーツビレッジ構想」として推進するものです。

オープン当日は関係者のテープカットの後、元サッカー日本代表選手を講師に迎え、利根沼田地区の小学生約300名がサッカー教室に参加しました。

後日、日本女子サッカーリーグ2部(プレナスチャレンジリーグ)公式戦として、スフィーダ世田谷FC対ベガルタ仙台レディースの試合が行われました。当日は両チームサポーターに加え、近隣の方々も滅多にない公式戦を観戦するため、大勢の観客が川場村を訪れ、スポーツ広場のリニューアル記念となりました。



<川場村名誉村民顕彰式典>

本村発展の礎を築かれた故永井鶴二氏と故大場啓二氏の「川場村名誉村民顕彰式典」が、川場村文化会館ホールにおいて行われました。

永井氏は村長として昭和42年に初当選され、村の基幹産業であった農業に観光を結びつけた「農業プラス観光」を村づくりの制作の根幹と定め、各種事業が現在においても展開されています。また、両氏が首長であった昭和56年には「世田谷区民健康村相互協力協定(縁組協定)」が締結され、都市と農村の先進事例として現在も継承されています。今日の川場村の発展は世田谷区との強い結び付きあってこそであり、その取り組みに寄与された両氏の功績を讃え、交流30周年の節目に合わせて顕彰されました。

式典には、永井氏長男の彰一氏と大場氏長男の敏正氏が出席され、関村長から名誉村民証書と名誉村民章が授与されました。その後、両氏の功績に賛同された多くの方から多大なるご寄付により建設された胸像の除幕式も行われ、式典に花が添えられました。

